



キクのハダニ対策について

光田 琴音

田原市は全国トップのキク類の産地です。輪ギク・スプレーギク栽培において6月以降のハダニ被害は甚大であり、秀品率低下の大きな要因となっています。ハダニ類は発生に気が付きにくい一方で、防除に苦勞する害虫の一つです。特に施設栽培の環境条件はハダニの増殖に適しており、日頃の観察と計画的な防除が重要となります。

1. ハダニについて

① ハダニの生態

キクに被害を与える主なハダニ類はナミハダニ（写真1）とカンザワハダニ（写真2）です。成長スピードは温度の影響を強く受け、気温が上がる時期は急激に個体数が増加しやすくなります。25℃前後では、約10日程度で卵から成虫へ成長します。また、ハダニの雌は1回に100個ほどの卵を産むため初期発生を見逃すと短期間でほ場に広がる危険があります。厄介な性質として、世代を繰り返すスピードが速く、他の害虫よりも薬剤抵抗性がつきやすい点が挙げられます。



▲写真1 ナミハダニ



▲写真2 カンザワハダニ



▲写真3 キクの被害葉についてハダニ成虫と抜け殻

② 発生場所と注意点

ハダニは高温・乾燥条件を好むため、施設内の暖房機周辺や入口付近など湿度が低下しやすい場所はより注意が必要です。多発すると防除が困難になるので、こまめに葉裏を観察し、ハダニの成幼虫や抜け殻（写真3）を見つけたら速やかに薬剤散布をしましょう。また、施設周辺や通路の雑草は、ハダニの発生源となるため、ほ場内外の雑草防除も欠かせない対策となっています。

2. 抵抗性がつきにくくするには

① 薬剤ローテーション

薬剤抵抗性の発達を防ぐため、作用の異なる薬剤を計画的にローテーションして使用することが大切です。同一系統の薬剤を連続して使用しないよう、防除履歴を確認しながら散布する薬剤を決める必要があります。また、薬剤散布の際は、葉裏まで十分に薬剤がかかるよう丁寧な散布を心がけましょう。

② 気門封鎖剤について

気門封鎖剤は、ハダニの呼吸孔を物理的に防ぐことで防除効果を発揮する薬剤抵抗性が付きにくい農薬です。今年度、普及課では界面活性剤を主成分とする気門封鎖剤の「フーモン」の試験を行いました。試験では、薬害は見られず、ハダニの発生が少ない時期のローテーション防除の一剤として十分に使えることが分かりました。フーモンは新たに展着剤として登録拡大され、殺ダニ剤としても使用回数制限がなく、多くの農薬と組み合わせて使用することが可能です（詳しい混用事例は日本化薬(株)のウェブサイトに掲載されています）。フーモンなどの気門封鎖剤は、薬液をハダニにしっかりかけることで効果が発揮されるため葉裏までしっかり散布することがポイントです。

3. 最後に

ハダニ対策は発生してからの対応だけでなく、日ごろの観察、環境管理、薬剤の使い方を組み合わせた総合的な防除がポイントとなります。早めの対応で、安定した輪ギク生産に繋げましょう。

写真提供：愛知県農業総合試験場環境基盤研究部病害虫防除室